



顧　　み　　る

島　　田　　美　　穂

英国の現代作家アイリス・マードックの『海よ、海』の冒頭に、晩年静かな海辺の館に引退した主人公が見た恐ろしい白昼夢のような光景が語られる。ある日、海辺に散策に出た彼の目の前の波間から、巨大な大蛇か龍のようなものが現れ、空中高く躍り上がり、直ぐ水中に姿を没する。これは日記に記すことも出来ないほどの恐怖に彼を陥れた。以後それは作品の表面には二度と姿を現すことはないが、以後その目にみえないものが物語の終わりまでを支配するのである。

今、巨大な世界の歴史が二転三転と反転する有様を目の辺りにすると、かつてわれわれが身近に体験し、今世界が自撃しつつあるのは、あの小説の中の大蛇か龍かとも思われる。これまで、ともすれば戦争によって失われた年月や人生をかちがちであったが、いまにして思えば、ここまで生きのびて、歴史の裏表を見る事ができるのは個人を越えた経験であり、若い頃の個人の凡庸な夢や希望が叶うとか、叶わなかったとかとは比較にならない遙かに大きいことであるとの思いが深い。

私の世代は第二次大戦がまさに青春を直撃した時代で、小学校の同窓の名簿を見ると男子の方は櫛の歯が欠けたように戦死者が多いのが目立つ。そして日本は、世界は、こんなに変貌した。自分自身は戦場に赴く立場ではなかったが、その当時の状態や彼等の気持を最も身近に感じ知っていたが故に、世の中が変われば変わるほど、青春の身を捧げて還らなかった人々への思いは強くな

る。そもそも何の犠牲もなく、この世界史の大転換が有り得たであろうか。

女学校の高学年から日本は戦時体制に入った。その時まで、英文学に進みたいと考えていたのが、諦めざるを得なくなり、ようやく学問の興味を知りかけていた私は強い挫折感を覚えた。方向転換して、奈良の女子高等師範の国語漢文科に進んだが、そこを卒業して、東北の女学校に赴任し、病を得て帰郷し、療養中に戦争が終った。戦後初めて女子に解放された京都大学の英語・英文学科にはいり、失われたものを取り戻そうとした。その大学卒業の頃病気が再発し手術し、そして長い療養生活が続いた半生であった。

B29戦闘機の爆音と灯火管制の暗い夜から解放されて、爽やかな五月の美しい青い空の下、賀茂大橋を渡って、京都大学の方向に歩いていた。無論排気ガスも騒音も無縁であった。と、どこからか、長い塀の内側からショパンのノクターンのピアノを弾く音が響いてきた。戦死した兄がレコードを集めていた懐かしい曲である。そのレコードも蓄音器も疎開したきりになった。長い間日本中に音楽は絶えていた。その日一日中、いや何日もその音は心に響いた。もう何の気兼ねもなく、誰に遠慮もなく美しいものを追及できる自由な世の中になったのだと言う解放感に浸り、キーツの美を称える詩がここに甦った。水晶の玉の零れるような澄んだ音とロマン主義の詩が心のなかで結び付いた。

一回生のころには、自分はロマンティシズムの英詩を勉強するのだと、決めていたのが、たまたまヴァージニアウルフを見つけたとき、その詩的散文が小説的なものと両方を満たしてくれると考えて、英文学の最初の論文には、彼女のものを選んだ。戦争が終わって、再び帰ってきた自由主義や個人主義、その極致である第一次大戦後の1920年代の文学に心を引かれたのは、間接的ながら自分の生まれ育った日本の大正から昭和初期にかけての時代の空気と繋がるところがあったからであろう。

その後興味はもっと新しいところに移り、現代作家ロレンス・ダレルに行き着いた。戦後の英国の小説が閉鎖的になり、古い写實的リアリズムの伝統に戻った中で、ベケットと共に、20代の実験的、開放的な小説の伝承者と言える。その唯一の評論『近代詩への鍵』の存在を深瀬先生から教えていただいた。まだ有名な『アレクサンドリア四重奏』刊行よりも前であった。その四部作の第

一卷『ジェスティーヌ』を示唆してくれたのは、若いケンブリッジを出たての京大の英人講師であった。昨年十一月にダレルはなくなった。三島由紀夫の時ほどの強い衝撃ではないにしても、その報を得た瞬間世界が空虚になった想いを止どめることができなかった。

深瀬基寛先生は、自分が大学在学中は初めは第三高等学校に、後は教養部の吉田分校におられたので、講義を伺う機会はなかったが、お宅へ何度かお伺いした。先生の『現代英文学の課題』は、T. S. エリオットとジョン・ミドルトン・マリイを扱った小冊子で、戦争中の昭和十七年に出版された。その頃奈良の学寮から休日に京都に帰省し、四条河原町辺りの本屋で見付けて、英文学への渇きを満たした思い出の本である。

戦後幾度か真剣に日本脱出を考え計画した。若し出ていれば別の人生も有り得たかもしれない。やがて海外への行き来はたやすくなり、異国の人々との付き合いも長くなった。日本では理工系の分野に比べて遅れていた文科系の学問研究も、ようやく隆盛に向かい、英文学の各種の学会は盛んである。いよいよ海外の学者との交流も盛んになり、国内での国際学会も増えつつある。これまで、一応英文学の小説を分野としてきたが、定年を一つの節目として、少し研究の方向転換を計りたい。

佛大へ移って十年の春秋が過ぎた。通勤のバスは市の北部を回ってゆく。春には霞に煙る紫の比叡の姿を望み、柳と桜をこき混ぜた鴨川堤の並木を屏風絵のように眺め、橋を渡れば舞台の書き割りの中を行くようである。秋には紅葉して錦絵のような景色となり、晩秋、初冬には遠くに重なり合う北山はしばしば時雨に包まれる。寒くなり始めるといつの間にか鴨川に、真っ白なゆりかもめがシベリアから吹雪きのように飛んでくる。まだ現在では、バスで京都の町中を通っていると、窓外の空に常に比叡山を始め三方の山々の姿があるが、建築物の高層化が進めばこれはお終いになる。

若いときは人間にばかり執着したが、いつの間にか人並みに自然の景色や四季の移り変わりに関心が移っているのに気が付くこの頃である。